



- 日 時：平成27年1月11日（日）
- 会 場：大阪府鍼灸師会館3階
- 講 師：日本鍼灸研究会代表 篠原 孝市 先生

●『医道の日本誌』2015年1月 臨床に活かす古典 「No.33 穴性」
中国では1930年代に『穴性』という考え方が出てきた。20世紀の初頭前後に生まれた羅兆琚、李文憲が三十代ぐらいに提唱したものである。薬の『薬性』から連想したものである。穴に効能があるという考え方。病態を気・血・虚・実・寒・熱・風・湿に分けた上で、その中に所属している穴を使うというやり方。262穴を8種類の病態の概念に区別する。『穴性』は、薬（の薬性）になぞらえたものである。主要な鍼灸書の経穴には、主治というものが付いている。穴性は主治から出てきたものではない。『穴性』は、穴に効能があると考えられている。中国では、穴自身に効能があるのかという反論と、主に寒熱のようなものは穴に反映するのでは無くて、手技（たとえば熱に速刺速抜、寒に置鍼みたいなこと）で処理するものだとの反論がある。

●六元正紀大論篇第七十一 第四十二章～第四十五章
<第四十三章より>

“帝”が問う。「春夏秋冬の到来が早い場合、遅い場合があるのは何故か」

“岐伯”が答える。「五運が大過の年は、春夏秋冬が早くあられ、五運が不及の年は春夏秋冬が遅れてあられる。季節のずれというのは常にある」

“帝”が問う。「（立春から春らしくなったり立夏から夏らしくなったり）時期がずれないで季節がくるとはどういうことか」

“岐伯”が答える。「太過でなく不及でない状態ならば、時期通りに季節はやってくる。通常の状態は、わざわざ（太過か不及）である」（五運の太過または不及は毎年有るのであるが、六気の三陰三陽がそれと相殺し平気という状態になっている。おそらく中国の自然観というのは、おだやかな調和したのが普通とは考えていない。不調和なのが自然だと考えている）

😊次回は、「六元正紀大論篇第七十一 第四十六章から」です。

皆様のご参加をお待ちしています。

（素問勉強会世話人 東大阪地域 松本 政己）